

令和 3 年 2 月 26 日
なら歴史芸術文化村整備推進室
委員 確認 済

第 1 回なら歴史芸術文化村コミッション会議 議事録

日 時：令和 2 年 12 月 21 日（月） 13：30～16：30

場 所：奈良県天理市川原城町 605 番地

天理市役所 5 階 533 会議室

出席者：（委 員）青柳コミッショナー、岡田委員、喜多委員、内藤委員、

永淵委員、並河委員、西尾委員、松田委員

（ 県 ）荒井知事、吉田文化・教育・くらし創造部長、

平田なら歴史芸術文化村 村長

概 要：青柳コミッショナー（なら歴史芸術文化村コミッション代表）が、コミッショナー代理として藪内委員を指名。平田村長より資料説明後、会議を一時中断し、現地視察を実施。会議再開後、文化村の運営や活用について実践的な意見を聴取。内容については以下のとおり。

事務局)

本日の会議に欠席されている相原委員、藪内委員より、本会議開催前に頂戴した意見を紹介する。

相原委員より「全国にある文化学園の関係校に、この施設をアピールする。特に教育旅行の関係は施設に興味を持つのではないかと。社会人対象の通信教育講座のスクーリングというカリキュラムの中で文化村の活用ができる。生徒は、物作りに興味を持っている方が多いのでファッションやアクセサリと関連するワークショップなどができればよい。」

藪内委員より「施設へのアクセスをもう少し充実した方がよい。なら歴史芸術文化村の名称は長いので親しみが持てる愛称があってもよい。施設にシンボリックなアイキャッチがあればよい。常に刺激的なイベントや様々な催しが行われ、賑わいがあればよい。」という意見を頂いた。

岡田委員)

天理大学には天理図書館、天理参考館があり、国宝や重要文化財などを保持しているので、文化村で展示をさせてもらえる機会があればと考えている。

また、大学には雅楽部があり、公演も行っており、学生の発表の場として使わせてもらうこともできる。そのように学生が施設を利用して活動するほか、イベントの手伝いや企画に

参加するなど、賑わいづくりに若者の力というものを役立てられると思う。そのことが本学の社会貢献にもなるし、学生の学びにつながる。

大学から文化村は、非常に近いので授業や活動の場として活用も可能ということで、授業に組み込んでいくことなどを事務局と相談しているところ。文化村を多いに利用させてもらいたい。

喜多委員)

私は滋慶学園グループで、北海道から九州まで音楽系の学校を運営しているが、エンターテイメントで、とても重要なことは発信すること。

2・5次元のミュージカルの方法、プロジェクションマッピングを使った方法、ユーチューブを使った新しい発信の方法など、最新の技術に長けている学校なので、それを活かして、奈良の文化とか、例えば、聖徳太子は何をしたかなど、20分のVRの映像やミュージカルなどで、子どもたちに興味をもってもらえることもできるのではないかなと思う。そういうコンテンツ制作を文化村と協議しながらできると思う。

内藤委員)

奈良国立博物館は、彫刻、絵画、工芸（漆塗り）の3部門の文化財の修理場があり、そこで館藏品や寄託品、国の指定品などを修理している。国の指定品の修復は国が行うが、寄託品に関しては所有者が、かつては100%負担していた。近年は、仏像館など色々なところに募金箱を置いたり、いろいろな基金を作って、寄託品の修理費用のかなりの部分を代用しており、これは所有者に非常に喜ばれている。

（文化村については）あれだけの組織・施設を維持していくのは、とても大変なこと。それなりの予算を確保して、お寺や個人の方々のものを修理していけば、今度はそれを活用していくことを考えることが必要。例えば、修理した作品を10年間は戻さないで、県の美術館で展示をしていく、あるいは修理している間は写真撮影をOKとするなど。おそらく来た人は写真をとりたいと思うし、それをインスタなどにアップすることでまた集客につながっていく。

また、最近、博物館の集客に大きく寄与しているのがレストランやカフェ。石川県の美術館は、いくつも賞をとっているパティシエをいれているために、休館日さえも開けなければならないというくらい人が来ている。

文化村は、施設が立派で、眺望のいいところにレストランができるので、来館者に喜んでいただけるものになればいいと思う。

永淵委員)

幼児期に、自尊感情や自己肯定感をあげていくには、アートの力は、すべて許容する。文化村では、子どもたち自身をそのまま受け入れることを目指し、アートということで関わっていこうと思っている。

また、想起したものを学ぶだけではなく、仲間とともにコミュニケーションをとり、自分の気持ちをはっきりとプレゼンをする、人の話を聞いて新たな発想を持ち自分のなかで凝縮したものを出したときに、どういう形になったかなど子どもたちは止めどもなく話す。そのような原点を大事にしながら、対話を中心として、子どもたち自身が、そこで心に根付くものを優先していきたい。

文化村では、奈良の文化に直接ふれる体験ができる。ここで経験したことが直接アートにつながるということではなく、奈良が好きという想い、それが心の中に宿ってくれるように試行錯誤していきたい。

並河委員)

天理市の文化財課も「文化財修復・展示棟」に入る予定なので一緒に連携していきたい。天理市には、古墳が1600個ほどあり、日本最古の山辺の道も通っており、非常に沢山のハイカーの方が来られる。また、池の向かい側にあるのが親里競技場で、天理大学を始めラグビーの試合時には沢山の方が観戦に来る。それらと連携もできると考えており、地域全体として一緒に盛り上げていきたい。

この数年、本市では、アーティストがこの土地に滞在をして市民のみなさんと交流しながら作品や映画をつくってきた。商店街の空き店舗にアートギャラリーを作り、アーティストが活用しているが、異口同音に奈良の土地で人とふれあいながら制作することに付加価値がすごくあると言う。実際に来るまで考えていたのと来てから作るものが、全然変わってしまっているという人もいる。文化村が、そのような場所になっていけたらと思う。

「芸術文化体験棟」と、「文化財修復・展示棟」との間でソフト事業の連携が大切だと思う。全国の他施設と比べても文化財修復の現場にふれながら作品を制作したり、発表ができるという場所はあまりない。

モダンなものから古典まで幅広く扱うアーティストが、「文化財修復・展示棟」で刺激を受けたり、化学反応をおこしながら創作している様子が出していけると非常に魅力になると思う。

また、そこに魅力を感じた親御さんが子どもを就学前教育のところで「体験教室にいかせたい」という形でつながっていくのではと思う。

また、ここに滞在をして制作活動するアーティストが、文化村のみなさんと話をすると、

普段は行けないお寺や古墳などに行ける段取りをつけてもらえると、そこへ行けて、帰って制作ができる。そのような施設になると全国にとって素晴らしい拠点ができたという認識が広まって行くのではないかと思います。

天理市としても一緒に良い流れをつくっていきたい。

西尾委員)

県立大学地域創造学部で、アートプロジェクトを教えており、自身もアーティストとして滞在制作などを行っている。また、学生の頃は、東京藝術大学に当時新しくできた現代アートの学科で学んだ。

奈良には東京藝術大学の施設もあり、学生は奈良に古美術研究旅行に来るが、古美術研究と文化財や現代アートとのつながりがあまりにもないことが、すごくもどかしく課題に感じている。この施設がそこを結びつけるきっかけになれば非常にうれしい。

実際に、文化村の施設に誰が関わっているのかというと、有名なデザイナーでもないし、有名な建築家でもない。実力のあるアートディレクターや学芸が入るわけでもない。21世紀美術館や、青森にある安藤忠雄の建築のアーティスト・イン・レジデンス施設とか、そういう訴求力というのは、まだない。

そういう意味でも実際に文化村を動かしていく専門家の力が重要になってくる。

「芸術文化体験棟」にアーティストが滞在するということに関して言えば、地域や市民とアーティストをつなげるアートマネージャーなどの専門家がいたので、そのような人と手を結んでやっていく必要がある。

また、多くの公共施設で感じていることだが、いろんな人への周知として張り紙を貼っているが、金沢の21世紀美術館は、初代館長が、建物をありがたく使ってもらうために、張り紙を一切させないという方針をたてて実践している。

お寺もそうだが、行動をサインで示すのではなく、緊張感で示していく。そこに行くとやってはいけないことはやらないし、たとえやっても、対応をしてという空気感を一緒につくっていけるとベストと思う。

松田委員)

私は、奈良にある東京藝術大学の古美術研究施設の施設長をしている。東京藝術大学には、古美術研究という授業があって、明治39年から続いている。奈良や京都に2週間滞在して、社寺をまわって仏像や障壁画などの古美術を見学する授業である。そういう古典を学び、新しい制作につなげていく考え方があり、それを体現する授業である。東京藝術大学は奈良の社寺、それを護り伝えて来た人たち、そういう人たちから多くのものを勉強させてい

ただいている。

そこで学んだことを社会に還元していきたい。今回こういう機会をもらい、藝大が100年あまりやってきた古美術研究旅行、その中で蓄積したノウハウを、この事業に活かせることはないかと考えている。

施設には、立派なセミナー室、展示室、修復工房の公開施設がある。環境もよいし、レストランとか地域のものを売る施設もあり、ホテルも建つので、藝大が積み重ねてきたノウハウを活用した、社会人向けの古美術研究旅行を考えたいと思う。

奈良県の外側から奈良県を見る、奈良に憧れて奈良が好きだという人も沢山いて、そういう人たちのより深い学びができるチャンスになればと思う。

古美術研究旅行の授業が100年以上も続いてきたのは、結局楽しかったからだと思う。楽しかった訳は、先生と学生でお寺を見に行くのも楽しいが、行った先々で食べたり飲んだりすること、そういうところでふれた何気ない奈良の食というものをとおして奈良の豊かさ、地域に根ざした文化を学ぶ、そういう古美術研究旅行のあり方、楽しみということと、この施設が目指しているところが重なることが重要なので、その二つをうまくあわせたソフトウェアとして「大人の古美研」をできないかと考えている。

それと、この施設は、人を育てる施設になればよい。古い仏像をみていると100年に一回とか修理が入っており、代々人の手が入って引き継いできている。現代においても生きている我々の世代が引き継いでいくことが必要。そのためにそれを担っていく若い人材を育てていくことが必要。

そういう人材を育成していくための一つの入り口に文化財の修復というものがあり、どういう仕事で、どのようにしたらそういう仕事につけるのか、どんな魅力があるのか、そんなことを伝えられていけるような施設になればよいと思う。

青柳コミッショナー)

いろんな考え方があがるが、やはり人が集まらなくてはならない。将来的には、色々やりたいということ、「それはレベルが低いからだめですよ」というぐらいになれば最高だと思うが、今は面白そうだったら受け入れるという方がよい。

コンテンポラリーアートのフェアなどもやってはどうか。色々、法整備がなされていて、企業が買うとき3年前から減価償却の対象が100万円までになり、企業にとって100万円までは気軽に使えるようになった。若手作家にとって100万円で購入してもらえるのは、かなりうれしい。また、つい2ヶ月前に国税庁が通達を出し、フェアを事前に申請しておく、その場所や建物の中だとその売買代金に対して税金がかからなくなった。それをその場所や建物などから持ち出すとはじめて税金がかかってくるという税制。

今申し上げた税制と100万円までが減価償却になることで、年1回くらい天理アートフェアなどの名前をつけてやるとおもしろいと思う。

また、合唱の全国的な大会をやるとか、一般家庭に転がっている、ちょっとした古美術を施設で直して、その展示即売をやる。そういうことも組み合わせて人が集まる場所になればよいと思う。どう実行するかは先ほど西尾委員が言うように、どういう専門家を組み合わせるとか、今後、相談したいと思う。

知事も皆さんのご意見をうかがっての意見をお願いしたい。

荒井知事)

相原委員のご意見について、文化学園の大沼前理事長は、生徒が奈良に滞在して帰ってくると作品が違ってくると言って、毎年、奈良に連れて来ていた。それを毎年、続けますよとおっしゃっていた。

奈良には、どのような効果があるかというのと、とにかくファッションのデザインが変わってくる、仏像をみたり奈良の歴史文化に触れたりすると何か触発されるということかもしれないが、滞在していただく場所が奈良市内のこともあれば、文化村で泊まって奈良市内や桜井に行ったりすることもある。昔の歴史や文化の魂に触れるということがあれば、何か変わってくるので、それを文化村で行いたい。文化村の魂はどのような運営をするかということなる。

藪内委員のご意見に対しては、アクセスについては、施設バスをもって送迎したり、あるいは明日香に行くなどしてはどうかと文化村の村長に話している。また、愛称やシンボルモニュメントはあってもよいかもしれない。賑わいはレストランを考えている。

岡田委員のご意見では、学生の授業参加について、他の大学もあるが、どのように利用していただくか、文化村と大学等が連携して、定期的に持続性があるアクティビティを行うようなことを考えている。

喜多委員のご意見については、音楽系のアートで生きる人を支援することができないかと思っている。それから、子どもにアートを教えると発想が豊かになるし、神経系の発達がよくなると言われている。文化村で、音楽や絵などをアーティストの卵と一緒に教えてもらえないかと思っている。

内藤委員のご意見については、国が行う文化行政は、国家発展のためにと予算を計上している感じがするが、地域は地域の振興のために予算をつけるというように思考が違う。地域振興はいろいろな角度があるが、国家発展となるとなかなか大変。

予算の面では、持続性をどうするのが課題。いろいろと工夫したいと思う。

地域振興と芸術文化活動は関係が深い。観光振興などは即時的な面もあるが、もう少し深

い意味があるのではないか。勉強する必要があると思う。

永淵委員のご意見に対しては、子どもに芸術をとすることは大事。例えばスイスのベルン市のパウル・クレー・センターでは、子どもに画用紙を並べて好きな絵を描かせる。それだけの教室だが、先生は「どうしてこういう絵を描いたの？」と聞くが、「このように描きなさい」とは教えない。文化村では、日本の習字のように「このように書きなさい」というのはやめたい。「好きなように字を書きなさい」「どうしてこの字を書いたの？」と心を引き出す先生がいる。芸術は子どもの心を知る手段であると、そういうことをしていきたい。そうすると子どもは自己実現、自己主張、自己尊重の考えができるのではないか。皆と違う絵を描いた子を褒めて欲しい。すると、違っていてもよいと他者性の認識ができる。利他心と自尊心を発達させるような芸術活動というのを子どもに教えることを実践したい。芸術文化を子どもに体験させて、社会性を身につけるようなこと。保育園や幼稚園等ではできないことを、ここではできるということに一番力を入れていきたい。

運動も大事であり、神経発達のためには子どもの遊び場をつくる必要がある。運動と音楽、芸術というのは、子どもの神経発達と社会性、他者性、自尊心を発達させる。しかも5歳から10歳の間で行うことが必要と言われている。これをやってくれる人を探している。

並河委員については、文化財の値打ちをいかに発見してもらうかが重要と考える。文化財そのものが発信しているものがあるのではないか。修復の前と後を見せて、それは、こういうものかもしれないと文化財の本質的なことを教えてくれる人が必要。

それと、文化村では何を「文化財」の対象とするかも考えることが必要。文化財は、いろいろ幅が広い。外国から持ち込まれたものも「ここに来るときれいに修復できますよ」とJICAと協力するということもある。

西尾委員のご意見については、文化村は、芸術作品を展示するだけの美術館ではなく、アーティストを育てる学校や音楽芸術の研究教室でもない。今までにない訳のわからない施設という感じだが、歴史芸術文化というテーマで地域振興につながる活動を育てていくような実験をする場であると考えている。

芸術文化の活動はどのように世の中に貢献しているのかを問いながら、アートをやっていると、地域に何かよいことがおこりそうなことを実験していきたい。

松田委員のご意見については、古美術研究、美術品の価値、古美術の魂をどのようにしたら感じてもらえるのかということ。魂がこもっているから迫力を感じる、側に立てばわかるというようなことでもあるが、信仰の対象から魂の対象になるような、しかも、自分で関わりたくなるような、自分で作りたいたいと思えるようなことができないか。自分の彫った仏像を持って帰れる教室とかもあるかなど。

アスペンセミナーという、奈良県内でも開催してもらっている古典の研究、読書会がある。

テーマを決めて集中セミナーをすることで、参加者には何か成果物があると思う。文化村には隣接してホテルがあるので、3日でも2週間でも泊まってテーマを決めて、場合によっては、明日香など近隣の市町村へ行ったり、そういうセミナーをすることもあると思う。

青柳コミッショナーのご意見に対しては、実は、県立大学に工学部を作る予定がある。工学部の生徒にデザインを、デザインは大きな構想の能力であり、構想を教える。デザインは企業にとってもすごく大事な力。デザインはデジタルであるが、デザイン力がないとなかなかデジタルが動かせない。デザインを文化村に来て教えてもらう。工学部の生徒が、文化村にデザインの教室があるから、ここにきてデザインを学ぶというようなコラボができないかと思っている。

また、即売会ができないかと。例えば、芸大の学生がきて木を持ってきてここで彫って、即売するとか、「自分でも彫りなさい」と言って、自分で手を入れて仏像をつくる、それを買って帰るというような即売形式のものも考えられる。

また、大きなテーマの大会をして、ここで泊まって、ホールで講演を聴いたり活動したり、シンポジウム形式もあろうかと思う。そのような活動のアイデアをこれから集めて年間のスケジュールを作っていくことを文化村の村長にお願いしたい。

青柳コミッショナー)

レストランの話ですが、私立の美術館で黒字になっている美術館が3つある。1つ目が島根の足立美術館、2つ目が大塚国際美術館、3つ目が富良野の後藤純男美術館がある。

後藤純男美術館は、団体客向けにカレーとハヤシライスなどにメニューを絞って、10分くらいの時間に100人分が提供できるシステムにしているので黒字になっている。そういうようなところもある。

喜多委員の話、音楽に関しては、集客ということでは、去年の紅白歌合戦で米津玄師が大塚国際美術館の中で歌ったが、若い人がいっぱいきた。そのように名のある人をどのように活用するかも重要なことだと思う。

以前、東大寺の大仏殿の前で天理大学の雅楽部のパフォーマンスを見たが素晴らしい。素晴らしい中にもラグビー部が一人か二人ぐらい入って踊るなんかして、笑いをとると、もっと面白くなるのではないか。

歴史系で、NHKで、月1回ぐらい奈良の尼さんのレシピを放送しているが、常にサステナブルで、楽しそうで、あんな料理教室をやってもらえたら面白い。

喜多委員)

クラシックは、文化村のあのホールくらいが使いやすい。滋慶学園の傘下に、ジャパン

アーツとう日本で最大のクラシックの集団がある。小粒だけれど、お客さんを呼ぶ力がある国際的アーティストがいる。そういう人たちでサポートしていくことは、我々でできる。知事にご意見を伺いながら支援ができると思う。

青柳コミッショナー)

300人くらい収容するホールには、小さな演劇が芝居をやるのにはちょうど良いが、興行的に成立するのは難しい。

喜多委員)

有料配信でやるというのはある。我々のグループのアイドルのライブには、コロナで実際に会場にくるのは100人だが、配信で2000円払った人が1000人来る。そうすると興行として成り立つ。ライブ配信は結構集まる。全国から来る。

立地があまりよくない所に全国から来てもらうには、配信で見ることができるようになればよい。音楽に限らず、仏像の修復でも、有名な仏像が入ってきた時に、ある時間を区切って、セミナーと修復の仕上がりをセットにして、500円で配信する。そういうことも今は簡単にできる。問題なのは、通信の回線の早さ。どれくらいのレベルでできるかは、相談してもらえればよい。ここに人が来るだけでなく、デジタルをつかって配信していく。そういうコンテンツもあってもよい。それだけ価値がある場所だと思う。

荒井知事)

小さな子どもにバイオリンを教えたい。バイオリンを沢山買って、子どもにバイオリンを教える人がほしい。「バイオリンを弾いていると子どもの神経発達にいい」と言うようなうたい文句でもつけて。バイオリン演奏は神経を使うから、発達すると思う。子どもの神経を統合する役割があるのではないか。保育園等と連携してできないかとも思っている。

喜多委員)

ジャンルとしたら、当学園の喜多弘悦（滋慶学園COMグループ音楽系副校長）がクラシック分野でもある。シンフォニーの音楽監督やミュージックセラピストにも新しいアイデアを持った人たちがいるので、相談にのることはできる。

岡田委員)

雅楽は、格調高いイメージがあるが伎楽というのものもある。コミカルな踊りが入っているので、ラグビー部の体の大きな学生が入って面白くすることもあるのかなと思う。

西尾委員がおっしゃった施設の張り紙について、私の専門は、成人教育だが、成人が学ぶ場は、規則があって、教えてやる、見せてやるというのが気になる。そういうことなく人が来た上で、緊張感があって、秩序が保たれている施設運営は興味深い。課題だと思う。

西尾委員)

(「芸術文化体験棟」には)スタジオがあったが、天理市は、先行的にアーティストを招いてレジデンスをされている。今後どういう形でされるか分からないが、文化村で行うアートプロジェクトに天理市にも入ってもらいたいと思う。子どもたちの話もあったが、いろいろな人たちが、古美術から現代美術、音楽まで芸術にふれる喜びを体感できる場所になることを考えると、若手アーティストに限らず、最初に造形芸術の分野でも有名な人に入ってもらって、奈良で作品を作るなどの場を見せられると、一気にひろがっていくのではないか。幼稚園児からプロフェッショナルまでが活動しているということをメッセージとして出せるとよい。

また、家具類や什器類などをそろえていくと思うが、奈良でこだわりをもって作っているものとか、ミュージアムとして考えると、しっかりと選ばれた家具がそろっていると、それがくつろぎの場や写真を撮る場になるので、家具ひとつひとつ選ぶのも慎重にできたらよい。

青柳コミッショナー)

明日香村の棚田で大きなかかしを作っているのを見に行ったら、おもしろく、いろいろな人が見にきていた。あのようなことを文化村で、みんなで作るということはどうか。

西尾委員)

明日香村のかかしを見たことはないが、地域の中で、すでにある造形とか、外から見たときに不思議な体験になるものを作るのは、十分あると思う。それは、企画する人のセンス、つなぎ方、教え方にもよる。企画する人が感じてこそできることかと思う。

青柳コミッショナー)

新納忠之介が、東大寺の仏像の修復をやっていた時に、コピーを作って売っていたと聞いた。大英博物館にも忠之介作の百済観音の模造があるが、素晴らしいものだ。

松田委員)

模刻制作は、東京藝術大学の保存情報などでやっているが、最近だと東大寺法華堂の執金

剛神像の模刻をやっている、3Dとか、X線の画像とか最新のテクノロジーを使いながら、古典技法に基づいてやると、これまで知られていなかった、心木を上下2箇所ですべて切ってねじって上半身の動きを作っているということが、模刻をやって初めてわかった。

非常に精密な模刻ができること自体も、平成・令和という時代を感じさせるが、竹内久一が、明治時代に執金剛神像の模刻をやっているが、その時代には、星取り機で測量して1～2年かけてつくっている。平成・令和では3DとかX線などの技術を使って、測量したり、模刻したりして作ることができる。そういう最新のテクノロジーの世界と手作りの世界、両方あって、古典を作った作者の思考過程が、作品の中から取り出せる。制作工程を復元することで、はじめて可能になる。

模刻は、像だけ眺めていても面白いが、プロセスを並べて展示してあげるとよりわかりやすく、若い人たちが、おもしろいと感じると思う。古典に向き合って、物を介して、作った人と向きあう、そういう世界を皆さんに広く知ってほしい。

内藤委員)

仏像に限らないが、国立博物館のはじまりは、模造品を展示するところからはじまっている。模造品を作ることによって、明治時代の芸術家たちは、技術を磨いて、失われた工芸技術を復活させ、作ることでいろんな発見があった。正倉院の模造品は、今も作っており、作ってみて作り方がわかったというのがある。文化村で模刻や模造ばかりするのもどうかと思うが、そういう奈良らしい芸術活動があってもよいのではないか。

青柳コミッショナー)

作る過程を公開して、写真をとってよいことにして、仏像に興味のある若い人たちに話題を作ってもらえば、かなり人が集まると思う。

内藤委員)

夏休みの宿題がつくれるような場所があってもよい。教える人がいて、場所を提供して、材料も購入でき、奈良らしいものを作るとか。たとえば、撥鏝（ばちる）を作ろうとか、象牙はないから何かで代用して。染めなども面白い。

西尾委員もおっしゃっていたが、なかなか人材がいない。大学で教育を勉強してきた人はガチガチ。是非、おもしろい発想、いろいろなアイデアを持っている人材でしかけていけば楽しいことがおきるのではと思う。

青柳コミッショナー)

鈴木さんという特別支援学校で美術を教えている人がいて、段ボールで巨大な人型を作らせている。みんな一生懸命、目を輝かせて作る。その様な取組は学校教育では、まわりを説得するのは大変だが、文化村で週に1回土曜の午後にやるなどすれば面白いと思う。

永渕委員、子どもたちに何かやらせる、遊ばせる、夢中にさせることは、ありますか。

永渕委員)

施設を最初に見て、素晴らしいと思ったのは、窓ガラスで全部空間がつながるところ。視野を奥にするとその向こうの人がやっていることを、見て関わるができるので、多様なかかわりを持つことができる。

「芸術文化体験棟」の一階の広いフロアですぐにやりたいことは、子どもが生き生きとした姿を見せる空間にすること。例えばクレヨンや絵の具で窓ガラスに絵を描く。最初、子どもは好きに描くが、その中で風景にあわせて描く子どもがでてくるだろう。その中で背景との一体感や、自分の世界観をつくりだす。その絵を残していると、次の子どもはぐちゃぐちゃにすること無く、それを活かして自分のトピックを描き足すなど、気がついたら一つの世界観ができていくことが起こりやすくなる。ガラス窓は裏側からも見えるので、来館者の人たちからは、楽しそうに遊んでいる姿が外から見える。あれがキャンパスかなあと、子どもの楽しんだ跡が子どもを誘ってくれる。

ただ、天井が高いとか、水道の高さとか、全体が大人設計になっている。それを今からプラスになるよう環境を変えていくことが大事「交流にぎわい棟」のフロアには、天井に動かせるライトがあったが、天井にはレールの溝でつながっていた。そういうのが「芸術文化体験棟」にもあって、レールにはライトやワイヤーがつけることができると、明かりを調節したり、子どもの作品を飾ったり、作る時に使うことができる。今の社会は、机に向かってやりましょうということが多く、小さいものしか作れない。大きな作品の展開というのがやりにくい環境であるので、施設に少し手を加えることを検討願いたい。

皆さんの話をきいて、歴史と子どものアートをどのようにつなげたらよいのかと興味深く聞いていた。子どもの遊んでいる姿を文化人類学で見ると子どもの発見そのものが、古代の人が発見したことと同じような瞬間として出会えるときがある。

例えば、ヒューム管の大きな丸の中で水をつけた筆を渡すと、壁面の天井に絵を描いたりする、こうやってラスコーの絵のように描きたくなるものなんだとか、そんな瞬間がいっぱいでてくる。「文化財修復・展示棟」で、彫刻などをしている現場に子どもが見に行けば、子どもたちにとって作業をされている皆さんは文化村の村人。そこでのかかわりも大切にしたい。作業場に行けば、音がきこえ、匂いがする。子どもたちと一緒に奈良の文化を諸感覚で思い存分感じ合う。それがうまく原体験になると、社寺を見た時に、「この匂い知って

る」となる。ここでの体験が奈良を好きになるとか、自分の表現をそのまま受け入れてくれる好きな場所となり、子どもたちが奈良の歴史にふれるきっかけとなるのではないか。

青柳コミッショナー)

おもしろいですね。そういう施設ができたことを、この周辺に住んでいる人たちが誇りに思っていくにはどうしたらよいのか。

並河委員)

永淵委員がおっしゃった、子どもたちがいきいきしている姿を見れば、親御さんやおじいさん、おばあさんは、どういう施設か分かるし、それが誇りになると思う。

西尾委員がおっしゃった、現時点では、同世代のアーティストにどこを目指しているのかということが、上手く波及していないところからすると、オープンの際に、これが目指している姿だというのを目の当たりにできる設えができれば一気に地元、奈良県、国内、世界になる。その点からすると、来年度、中頃から下半期に創作活動で、実際にやっていただける方としっかり対話しながら、オープンの日にいきいきと使っていただいている姿が見られるというのが大事だと思う。

青柳コミッショナー)

いいアイデアが沢山でたが、最後に知事のほうから一言お願いします。

荒井知事)

ありがとうございます。子どもに来てもらって、大人が見る。その帰りに、食事を一緒にして帰るとか、レストランがそのような形でいけることもあると思う。お母さんたちがアートの教室をして、座談して帰るというコースや障害者の方がアート活動をするといったことがあると思う。

お母さんが、木の装飾品やペンダントとか工芸品で簡単にできるものを、「私これをつくったのよ」と自慢できるような教室があるとか、シニアでも神経を集中して脳を活性化することがあると思う。手を動かしたり、それがコミュニケーションの道具になる。「どこでそういうことができるの」と話が弾むとか、連鎖があるようなことをいろいろ考えて、喜ばれるような活動が続くように願う。

いろいろなアイデアを頂いたので、事業執行は平田村長に任せて、私は財政的にできるだけサポートしたいと思う。

青柳コミッショナー)

最後に平田村長、決意のほどをお願いします。

平田村長)

ありがとうございました。建物は建ち上がり、あとは、内容を固めていく段階だと考えている。各棟で実施する活動の柱は決まりつつあるが、具体的にどうするか、残り一年少しの期間で考えていきたい。

今日のご意見を参考として、いろいろと考えていく中で、迷うこともあると思う。個別にご意見を伺うこともあるかと思うが、ご協力をお願いしたい。

【以 上】